



# 医学部だより

第17号

2008.11.1



## 医学研究のグローバル化と医学教育

医学部長 松本俊夫

従来、学問は中心となる大学や施設に権威と呼ばれる優れた人材が集積し、これら権威の下に世界から若者が集まりこれを修得すると共に、一緒になって新しい概念や仮説を構築することで進歩してきました。そしてこれら世界のメッカとなった施設で学んだ若者が各地に移りそれぞれの施設で新たな世界への発信地となることを目指して研究を進めることで新たなメッカが生まれ次世代の研究者を育成してきました。一方わが国では、長い間これらの権威から学んだ学問を翻訳や紹介するだけでも国内では権威と見なされてきました。そして国際的には評価されるような実績がなくても国内では権威として通用することも多々見られました。しかし、最近10年余りの間に進んできた急激な情報ハイウェイの整備拡充は、もはやニューヨークや東京に対し遠隔地に居ることが何の不利ともならないくらい一瞬にして世界中に情報がインターネットなどを通じて流通することとなり、計り知れない変化をもたらしています。その結果、世界に通用する研究でなければ評価されないというまでに、研究のグローバル化が進むこととなりました。

こうして急速に進むグローバル化の中で、徳島大学医学部が如何に教育研究機関としての存在意義を維持し高めていくかは我々にとって最大の課題であり挑戦でもあります。世界から発信された情報をいち早く的確に把握する力、一歩先を常に目指した研究を推進できる力、また世界の研究者と対等に討議し自らの研究に基づく論理を主張できる力などを培い身につけてもらう教育を推進する必要があります。その為には、低学年からの医学英語教育の充実、IT関連の情報収集能力の向上、原著論文の速読能力や把握能力の向上などが医学部の卒前卒後教育の中でも更に求められるものと思います。そして何よりも、こうして得た情報を基に自らの頭で考え、自らの力で構築した仮説を自らの研究成績から築いた論理をもって証明する能力を持つ研究者の育成こそが、徳島大学の今後の発展に欠かせない要件

の一つであることは言うまでもありません。

この様なグローバル化の中にあつて海外留学の意味もかなり変遷してきたものと思われます。すなわち、世界のメッカとなるような研究機関の権威と呼ばれる研究者の下に留学して多くを身につけ優れた成果を上げることは極めて重要なことですが、これらの成果はいち早く世界のどこからでも入手することができます。これらの機会を活かし自らの頭で論理を構築し研究を推進できる能力を優れた指導者の下で身につけ、また世界の多くの研究者と交流し情報交換できる能力を身につけることこそが、その後の研究者としての自立にとって大切ではないかと思えます。

研究のグローバル化につれて、これを担う研究者の育成に当たる教育機関のあり方に大きな変化がもたらされつつあるのは既に述べた通りですが、その成果を応用する医療面にも大きな影響が及びつつあります。すなわち、疾患の原因が同定されたり新たな治療法が開発されると、瞬く間にこれらを基本とした診断や治療がグローバルスタンダードとなります。そしてこれら最新の診断・治療等を適切に使用できなかった場合にも医療提供者の責任が問われることとなります。医学・医療が進歩すればするほど医療従事者に対する社会の要求は高くなり、したがってその責任も重くなっているのです。こうして医学研究のグローバル化は、自ら研究を行っているか否かに拘わらず、医学部における教育、研究、診療のあらゆる面で大きな影響を我々に及ぼしつつあります。この中で徳島大学医学部は、常に医学教育のあり方を真剣に問いつめつつグローバル化の波に対応し、これを活用することでその個性と特徴を最大限に伸ばし、優れた人材の獲得や育成を通じて前進を続けて行くことを目指したいと思えます。そして優れた医学研究者・医療従事者の育成を通じて社会に貢献していきたいと考えています。

特集

## グローバルな研究者をめざして

## ベイラー医科大学留学記～ダラスから

Baylor Institute for Immunology Research, Baylor Health Care System  
池本 哲也

徳島大学医学部の皆さん、初めまして。平成10年卒業、徳島大学・消化器・移植外科の池本と申します。今回、医学部だよりに私の留学について書かせて頂くこととなり、気恥ずかしい限りですが、現在の私の状況を書き連ねてみたいと思います。

大学時代はサッカーばかりしていましたが、徳島大学卒業後、第一外科（現消化器・移植外科）に入局し、愛媛県立中央病院、兵庫県立淡路病院、徳島県立三好病院等を経て、徳島大学大学院に入学、博士課程終了後（生体防御医学の安友教授に御指導頂きました）、徳島大学病院・徳島大学で勤務していました。当科の島田教授の推挙もあり、2007年にカナダ・エドモントンのアルバータ州立大学に留学し、現在はアメリカ・テキサス州ダラスにあるベイラー医科大学で上級フェローとして働いています（写真1、2）。



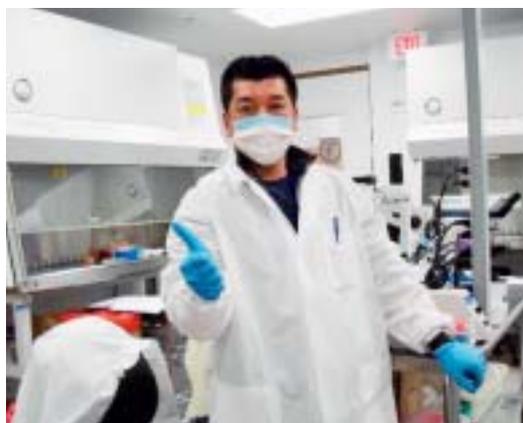
(写真1) ベイラーメディカルセンター。



(写真2) 上司のベイラー医科大学の松本教授と。

こちらでは、これまで研究してきた移植免疫（免疫寛容誘導）についての研究、また、膵島移植の研修を行っています。研究の概略は、生物にはそもそも自分のものではないもの（細菌、ウ

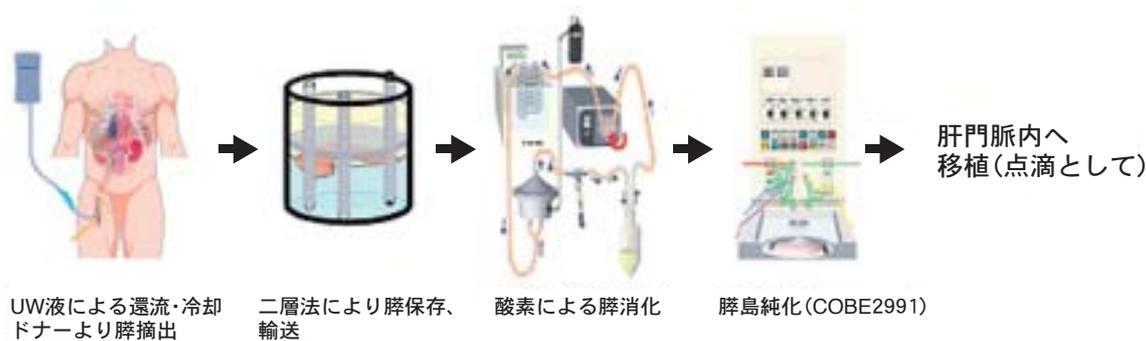
イルス等の外来抗原、腫瘍、移植臓器）を排除するシステム（免疫）が備わっています。移植片に対するものは、「拒絶」と呼ばれますが、移植の際にこれを制御するのが免疫抑制剤です。残念ながら、現在の免疫抑制剤は非特異的で、ドナーの移植臓器のみならず、一般の細菌・ウイルス・原虫などの感染、腫瘍の発生さえも許してしまう危険性があります。これを恐れて免疫抑制を効かせないと、せっかく移植した臓器が拒絶されてしまいます。このためドナー特異的（ドナーの臓器だけ拒絶されないようにする）拒絶の制御は、移植患者さんにとって大きな福音を与えると考えられています。また、移植前にあらかじめドナーの方の輸血をしておくこと、移植成績の良いことが知られていますが、その仕組みは良く分かっていません。そこで、このメカニズムを解明すべくマウスを用いて研究を行っています。今までにドナーのMHC Class II 細胞移入によるドナー特異的調節性T細胞誘導（細胞障害に働く他のT細胞を強力に制御する細胞群です）が重要であるとの結果を得たため、現在はその効果的誘導方法を模索しているところです（写真3）。



(写真3) 動物実験棟の細胞調整室にて。

更に、膵島移植とは、1型糖尿病（若いうちに自己膵島炎で膵島が破壊され糖尿病となり、無自覚の低血糖発作や合併症に悩まされ、長期的には生命の危険があります）の患者さんに対し、ドナーの方の膵臓からランゲルハンス細胞を特殊な方法で分離・精製し、レシピエントの肝臓内（門脈内）に点滴の要領で移植するといった比較的新しい細胞移植です（図1）。

その特徴は、局所麻酔で行えるほど低侵襲であること、低血糖発作からの解放や血糖の不安定性の解消ばかりかインシュリン完全離脱の可能性があること、失明、心血管障害など、重大かつ致死的な糖尿病合併症発症を軽減し患者さんの予後を改善する可能性がある（全世界的に調査中です）、無菌的に調整されるので拒絶を受けても摘出の必要がないこと（自然に吸収されます）等が挙げられます。欧米ではすでに1つのオプション



(図1) 膵島分離のプロセス。ペイラー医科大学の松本教授のご好意により図を改変

として施行されており、格段の症例数を誇るペイラー医科大学でその研修を行っています。脳死のドナー患者さんから我々の手で膵臓を摘出し(写真4)、二層法と呼ばれる保存を行いつつラボに持ち帰り、消化酵素、特殊な遠心分離装置(COBE2991)で精製しています(写真5)。膵島移植は細胞移植であるために、免疫学的装飾やカプセル化が可能と考えられ、研究による洗練により更なる発展(ブタ膵島の使用、更に低侵襲な皮膚への繰り返し移植など)が期待されています。

今後は、移植免疫学での「聖杯」と呼ばれるドナー特異的免疫寛容誘導を目指すとともに、臨床応用への道を拓きたいと思っています。各種移植に応用し、肝・膵島移植を受けられる患者さんの成績を上げることが出来、「病気、良くなりましたよ」と笑顔で言って頂ければ最高！と思っています。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えて頂きました徳島大学消化器・移植外科の島田光生教授、ならびに医局員の方々、また同門の先輩方に厚く御礼申し上げます。私のこの拙文が、医学部の後輩である皆さんの向学の一助となれば幸いです。



(写真4) ドナーから膵摘出中。



(写真5) ラボに帰り、直ちに膵島分離を行う。

## 研究 留 学 記

徳島大学病院 麻酔科  
ウィスコンシン医科大学ポスドク研究員  
河 野 崇

私がアメリカ留学への思いを持ち始めたのは比較的遅く、大学院を修了して数年経ってからでした。私の主たる研究分野は、“電気生理学、特にイオンチャネルについて”であり、生体内の種々の組織のイオンチャネルの役割とその麻酔薬の影響を研究していました。日々の多忙な臨床生活の合間を縫って細々と研究をしている中、一度先進的研究室があるアメリカで研究にどっぷりとつかってみたいと考えようになりました。そこで、現在の留学先である Medical college of Wisconsin (MCW) の Bosnjak 博士と E-mail でやりとりをした後、2007年7月に研究室を訪問しインタビューを受け2007年12月渡米の研究留学が決定しました。

MCW は、米国ウィスコンシン州のミルウォーキーに位置しています。シカゴからミシガン湖畔を車で1時間半程北上したところにある中規模都市です。ウィスコンシン州は酪農で知ら

れた地域で、ミルウォーキーは Miller beer をはじめとしたビール産業がメインの都市です。

Bosnjak 博士のもとにはいくつかの研究グループがあり私はその中の神経グループに配属になり、慢性疼痛に関しての研究に従事することになりました。上司にあたる Costas 博士は麻酔科医で臨床と研究を両立させており、2005年 MCW に PI としてのポジションを得て自身の研究室をもつことになり、私は Costas 研の博士研究員第一号となりました。その後ギリシャからの研究員が加わり現在は3人で研究を行っています。全員麻酔科医であることから、共通の話題も多く、同じ方向性で研究が進んでいます。

研究では、最初はラット神経痛モデルの作成とパッチクランプのセットアップを任せられました。このラボは神経痛モデルとして、L5とL6 脊髄神経を6-0 絹糸で結紮することで作

製する通称 Chung モデルを使用しています。皆さんの申訳ない程の熱心な指導のおかげで今では一匹約8分（最初は30分以上）で作成することができるようになりました。パッチクランプも約1か月でデータが取れるようになりました。現在の研究内容は、神経痛ラットと Sham 手術ラットの脊髄後根神経を比較した疼痛機序解明、特にKイオンチャネルの役割を中心に検討しています。研究グループ自体は小規模ですが、他の研究室との交流が多く機器、試薬、プロトコールなどを得やすい環境にあります。アメリカの研究施設の特徴かもしれませんが、個人で大型機器を所有していることは稀で、大型機器の大部分は共通機器として大勢の研究室で利用する機会が多いです。個々の研究室レベルでの機器については、日本の方が充実しているかもしれません。また、セミナーは頻回に行われ、国内外の一流研究者の講演を聞くことができます。アメリカの研究室の強みの1つは、トップレベルの研究・情報に触れる機会が多くあることだと思います。

渡米前後の1-2ヵ月は、かなり大変でした。特に徳島育ちの私と妻は、真冬に入国したため極寒（-20度以下）と大雪に悩まされました。いろいろ苦労もありましたが、日本からのわずかな荷物で生活を立ち上げることができたのは、研究室のメンバーそしてMCWに留学されている日本人研究者の方々の協力があったことであり、人との繋がり大切さをあらため



MCW 医学教育棟と隣接する病院群

て実感しています。異国での生活は、今までにない興味や好奇心が湧き楽しく生活していますが、一方では戸惑うことも多くあります。しかし困っている時にはかならず助けてくれる人がいて心の温かさを常に感じています。Costas 研究室そして日々の生活において経験したことはとても貴重で、またそれを糧に自分を成長させられたらと思います。

## 留 学 記 - Duke University Medical Center より -

呼吸器・膠原病内科 平成9年卒業  
後 東 久 嗣

〈はじめに〉 私は徳島大学医学部呼吸器膠原病内科から、2006年10月1日より米国ノースカロライナ州ダーラムにある Duke 大学に Research Scientist として留学中です。渡米直後はいろいろ苦労話や笑い話満載でしたが、こちらで生活を始めてはや2年が経過しました。この留学体験記が少しでも今後留学を検討されている方のご参考になればと思います。

〈Duke 大学〉 Duke 大学は、North Carolina 州（ニューヨークとフロリダの中間あたり）の Durham 市という所にあります。日本ではいまひとつ知名度が高くありませんが、実はアメリカ大学ランキングで Top 5 にランキングされている有名私立大学です。特に医学系は強く、全米でもトップクラスの研究レベルを誇っており日本からも数多くの医師やポスドクの方が研究に来られています。私が所属するのは Department of Cell Biology の Jo Rae Wright 教授のラボです。Wright 教授は肺サーファクタント研究の第1人者で、現在私もノックアウトマウスを用いて様々な呼吸器病の病態解明に取り組んでいます。教室員は15人ほどで、Wright 教授が大学院の Dean を兼任していることもあり、その殆どが PhD を目指す大学院生です。日本と最も違うところは、ここでは大学院生にもきちんと給料が支払われることでしょうか（そのかわり PhD への道も険しいですが）。研究面において、量でも質でも世界をリードする一端はこういったところにもあるような気がします。キャンパスは広大で、場所によっ

ては車がないと移動できません。信号や交差点も普通にあるので、キャンパスというよりは町の一角が大学といった感じです。田舎で自然豊かなのでせかせかした雰囲気もなく、「Southern Hospitality」という言葉がそっくり当てはまるような親切な人が多く、慣れない日本人が家族とともに留学するには良いところではないでしょうか。

〈仕事〉 前述しましたように、現在私は肺サーファクタントの呼吸器疾患における役割について研究しています。日本の時とがらりと研究テーマが変わったので苦勞することも多いですが、解明されてないことも多く非常に興味深い分野だと思います。Wright 教授の人徳もあり、非常に気分良く研究生生活を送っています。日本の時とは違い時間が基本的にゆっくりと流れるので、週末は家族と過ごすことが多くなったのも留学して良かった点の一つだと思います。

〈人とのつながり〉 色々な意味で自分は今充実している、と感じます。2年間でこのスペースでは書ききれないほどの貴重な経験もさせて頂きました。苦勞やトラブルもありますが、価値観も言葉も違う人たちと普通に触れ合う日々そのものも宝物のように感じます。チャンスがあれば、是非皆様も海外留学を目指されてはいかがでしょうか？どんな分野であれ、その最先端を走っている所に身を置くだけでそれはかけがえのない経験のように思います。

## テキサス大学サマー・リサーチ・プログラム体験記

医学科4年次 山本 雄 貴

私は5月末からちょうど8週間、米国テキサス州ヒューストンにあるテキサス大学医学部ヒューストン校 (UTHSC-H) のサマーリサーチプログラムに参加させていただきました。このプログラム参加は徳島大学とテキサス大学との交流協定によるもので、今回が初めてということもあって準備など大変なこともありましたが、アメリカの医学研究の一端に触れる貴重な機会を得て、また短期間ではありますが異文化での暮らしを体験できて本当に充実した2ヶ月間となりました。

UTHSC-Hでのプログラムでは学生がそれぞれの希望の研究室に配属され、そこで研究活動の基礎を学びます。私は病理学部門のDr.Actorのラボでラクトフェリンというタンパク質が人体の炎症反応に及ぼす影響と、細菌性の敗血症マウスに対するラクトフェリンの治療的効果を研究するお手伝いをさせていただきました。周りがすべて英語という環境の中で実験するのは、はじめはかなり緊張しましたが、気さくで親切なラボのメンバーのおかげですぐに慣れることができました。研究室での実験のほかにも、週2回のセミナーに参加したり、UTHSC-Hがあるテキサスメディカルセンターの他の施設へ行ったりすることもできました。休みの日などはラボのメンバーとメジャーリーグの試合を観に行ったり、徳大とも交流の深いDr.Kulkarniにホーム



パーティに呼んでいただいたりしました。また、現地の学生や同じアジアからの留学生たちとはNASAのスペースセンターへ行ったり、お酒を飲みにいったりして仲良くなりました。今思い返すと本当に楽しく、また様々な体験をすることのできた留学生活でした。最後になりますが、今回の留学に際して大変お世話になりました松本医学部長、村澤医学部長補佐はじめ諸先生方に御礼申し上げます。

医学科4年次 黒川 憲

5月22日から2ヶ月間、テキサス大学医学部におけるSummer Research Program (SRP)に参加する機会を得ました。SRPには臨床系から基礎系まで数多くの教室が参加しており、私は内科系のMedical Genetics, Milewicz教授の教室を選びました。Milewicz先生は、臨床の傍ら遺伝性の解離性大動脈瘤について研究を行っており、30人を超える教室は非常に多国籍で一人一人の個性が強く、とても刺激的でした。また、週2日、SRP全

体でランチセミナーがあり、NASAによる宇宙病の講義、米国の医学教育システムの紹介など、多くの興味深い講義が用意されていました。そして多くの講義において、学生が様々な疑問を投げかけると共に、講師もそれに答えていく有機的で活気ある講義スタイルであったのが新鮮でした。ところで、本プログラムは元々医学部の1年次 (MS-1)、さらに医学部進学を目指す米国内のCollege 3-4年次を主な対象としています。さらに海外の提携校からの参加も積極的に受け入れており、今年は日本から2名、中国から3名、台湾から6名の計11人が参加しました。したがってSRP全体としては、約半数の学生がMS-1、そして残りがCollege生と留学生という構成になっています。そして休日は、現地で知り合った方々がバーベキューや独立記念日の催し、NASA観光や大リーグ観戦など、様々なイベントに誘って下さり、大学外でもとても充実した生活が送れました。また、去年徳島大学を訪れたマイケルたちやクルカーニ教授と再会する事もでき、カヌーでの川下りや教授宅でのホームパーティーは、特に記憶に残る経験となりました。最後になりましたが、今回の留学にあたっては、松本医学部長を始め、数多くの先生方に大変お世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。



## 米国への臨床留学

教育支援センター

米国に臨床留学するにはECFMG（米国での研修医プログラムへの参加能力を評価する機関）が発行する認定書を取得する必要があります。その為にはステップ1とステップ2と呼ばれる2つのCBTと臨床技能の実地試験を受けることになります。ステップ1は、基礎医学に関する問題MCQ約350問から成ります（医学部在学中で基礎医学修了者に受験資格あり）。ステップ2は、臨床医学に関するMCQ約400問と、11人の模擬患者に対し各々15分の問診と身体診察を行う技能試験（CS）からなります。受験資格は医学部6年生以上です。最後の臨床技能試験だけは米国での受験になりますが、それ以外ではわが国で

の受験が可能です。これに合格すれば米国の研修医プログラムに参加できますが、一定の臨床研修を終えた後、ステップ3と呼ばれる臨床知識を問うCBT（MCQ）の試験があります。これに合格すると、合格した州で医師として働くことが可能となります。本学ではKalubi Bukasa先生がステップ1、2の受験指導を行っており、前年度はステップ1では6学年の居軒 和也君、ステップ2CSに小児科の大西 敏弘先生が合格しました。

<http://www.ecfm.org/>

<http://www.familymedicine.jp/myhp/studentmedexaml.html>

[http://www.linkstaff.co.jp/global\\_abroad.html](http://www.linkstaff.co.jp/global_abroad.html)

## オープンキャンパス

### 医学科

8月8日、長井記念ホールにおいて医学科オープンキャンパスが開催された。猛暑のなか、高校生を中心に250名近い参加があった。参加者数は昨年よりやや少なかったが、ここ数年、増加傾向にある。当日は、泉医学科長の挨拶および佐野入試委員による医学科紹介に引き続き、基礎、臨床それぞれミニ講義が行われた。基礎医学からは生体防御医学分野・安友教授が、がん治療につながる免疫システムについて講義され、また、臨床医学からは、胸・内分泌・腫瘍外科学分野・丹黒教授が、がんの外科的治療について、アニメーションも交え講義された。参加した高校生からは、「私も医学部に入ってこんな研究、勉強をしたいと思った」「外科医になりたいと思うほどおもしろかった」などの感想があり、好評であった。続いて4班に分かれ、それぞれ統合生理学分野（勢井教授）、機能解剖学分野（福井教授）、法医学分野（西村教授）、疾患ゲノム研究センター（岡崎教授、片桐教授、親泊教授、高浜教授）の研究室の見学と、チュートリアル室やコンピュータールーム、スキルスラボなどの見学を行った。これら施設見学についても、「設備が整っていて、自分もここで研究したい」「法医学に興味を持っていたので非常によい体験となった」などの感想が寄せられた。参加者のニーズは、講義や施設見学のように、教育・研究環境を実際に体感することであるということが再認識された。現在、徳島でも医師不足が深刻な問題になってきている。医師をめざす学生の、一人でも多くが徳島大学を受験してくれるよう、さらに魅力あるオープンキャンパスを企画していきたい。 勢井 宏義



### 栄養学科

平成20年8月7日午前に開催しました。長井記念ホールで宮本学科長の挨拶、平成21年度入学者選抜の概要説明および質疑応答（武田）、ミニ講義「飛躍する栄養学科」（武田）、ミニ講義「食育とは」（酒井教授）を行いました。栄養学科棟へ移動して研究室の見学や各教室の卒業研究中間発表会に参加していただきました。受験生238名と保護者や教諭の250名以上が出席しました。徳島県が168名、近畿・中国・四国が中心ですが、北は茨城県から南は沖縄県からの参加がありました。最後にオープンキャンパスについてアンケートに答えていただきました。オープンキャンパス開催については、高等学校内のポスター、本学ホームページ、高等学校教員および家族からの情報が多く、本学ホームページ充実と高等学校教員への通知が重要と思われます。参加した動機としては、栄養学に興味があり進学を考えているので、どのようなところか確認したいことが大きな目的です。強いインパクトを与えたのは、ミニ講義では「食育」「ストレスと栄養」「わかりやすい講義」で、学科棟見学では「研究施設の充実」「医学栄養学」「国際的活動」「スライドを用いた卒業研究発表」がキーワードとして記入されており、栄養学についての関心が強くなったという意見が多かった。以上より、本年度のオープンキャンパスは参加者の目的に十分対応できたと考えています。 武田 英二



### 保健学科

保健学科のオープンキャンパスは8月7日午後1時から行われました。今年、397名（看護学：194名、放射線技術科学：91名、検査技術科学：112名）が参加し、昨年より120名増加しました。収容人数の大きな長井記念ホールで開催しましたが、予想以上の参加者数で、席が不足しご迷惑をかけました。説明会終了後のアンケートからみると、学科・各専攻別の説明および相談会はおおむね良い評価を頂きましたが、時間配分に問題を残しました。また、参加者の学年別では高校1、2、3年生の割合は17%、49%、36%で、本学科を強く志望する方は70%を超え、比較的早くから進学先として医療・保健系に大きな関心のあることがうかがえます。午前中に行った看護学専攻体験入学では、51名の受講生が良い経験を得たと評価しています。暑い中、参加された高校生、保護者、先生の皆様に感謝いたします。 前澤 博

# 数字で見る医学部

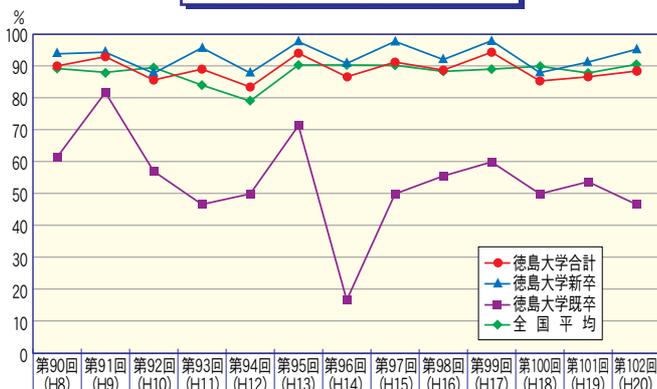
## ◆ 入学試験（医学・栄養・保健）

平成20年度 徳島大学医学部入学試験受験者・合格者数調・入学者数調

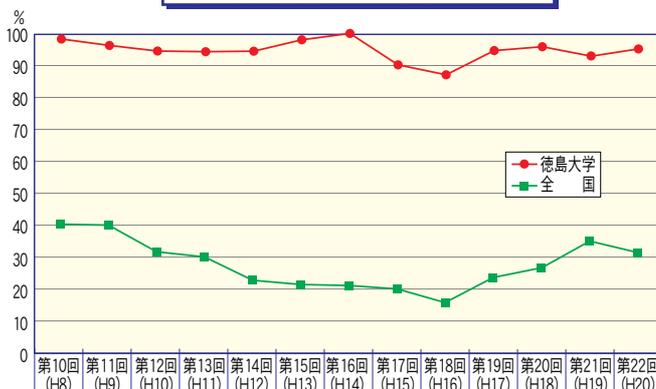
	定員	志願者	受験者	合格者数	入学者数	男	女	県内	県外	海外	現役	一浪	その他
医学科	95	409	342	96	95	68	27	28	66	1	28	38	29
栄養学科	50	172	99	55	50	8	42	18	32	0	39	9	2
保健学科	看護	70	373	254	76	70	5	31	39	0	58	8	4
	放射	37	212	150	39	39	29	9	30	0	30	5	4
	検査	17	43	39	19	19	6	10	9	0	12	5	2

## ◆ 国家試験

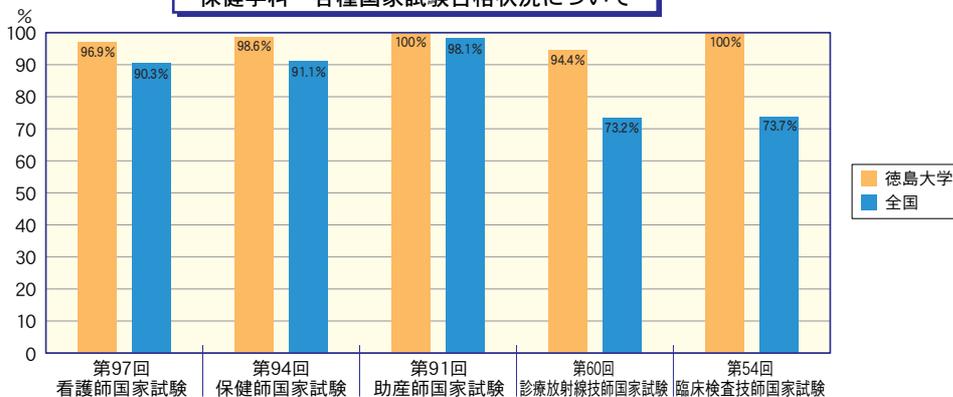
医師国家試験合格者の推移



管理栄養士国家試験合格者の推移



保健学科 各種国家試験合格状況について



## ◆ 科学研究費補助金採択状況（医学部・附属病院の合計）

(平成20年9月1日現在)

研究種目名	平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度	
	件数	金額(千円)								
特定領域研究(2)	9	83,500	11	60,800	9	67,200	8	63,200	6	41,200
基盤研究A(2)	0	0	1	18,590	1	14,430	1	11,100	1	13,900
基盤研究B(2)	21	102,350	18	96,100	21	143,950	13	67,000	14	72,700
基盤研究C(2)	68	100,800	59	89,500	59	98,200	57	93,100	65	92,983
萌芽研究	10	16,800	10	17,900	10	16,400	5	8,600	4	6,100
若手研究(S)									1	25,200
若手研究(A)	1	7,400	1	8,710	2	14,690	3	19,100	3	13,800
若手研究(B)	38	58,900	55	89,900	56	93,900	46	70,500	39	59,600
若手研究(スタートアップ)					1	1,300	3	3,600	7	10,510
特別研究促進費					1	2,200				
特別研究員奨励費	3	3,000	0	0	4	3,800	4	3,600	1	600
合計	150	372,750	155	381,500	164	456,070	140	339,800	141	336,593

## 平成20年度 6年生OSCE成績優秀者



**最優秀賞**

堀田 芙美香

平成20年5月10日に臨床実習クリニックの総仕上げとして6年次を対象とした advanced OSCE を実施しました。成績が特に優秀であった学生には福井教務委員長より表彰状が授与されました。このような臨床技能試験を通して臨床能力の向上が期待されます。



**優秀賞**

岩名 真帆 小菊 愛 齋藤 友子 松本 梓 坂東 美佳

**部門賞** 評点評価部門

白川佳也子 鹿草 宏 高島 健司 中村 達郎

**部門賞** 概略評価部門

松下 健太 真鍋 繁雄 三井 康裕 森 美穂子 山田 祐嗣

## 各賞受賞・若葉会奨学賞

医療法人若葉会の寄贈の趣旨に沿い、徳島大学医学部並びに徳島大学大学院医科学教育部及び栄養生命科学教育部に在学する私費外国人留学生（専攻生及び研究生を含む。）の奨学に資することを目的に授与されるものであります。

本年度は、次の3名が授与されました。

医科学教育部 医科学専攻  
修士2年次 ツアイ ミン（授与式所用で欠席）

医科学教育部 プロテオミクス医科学専攻  
博士2年次 チャン ホアン ナム

栄養生命科学教育部 人間科学博士後期課程  
博士1年次 ガデルモウラ モスタファ



## 第60回西日本医科学生総合体育大会

剣道 女子

3位

徳島大学



水泳 女子 100m背泳ぎ

2位 (1分17秒74)

三崎 万理子  
(医学科6年次)



三崎万理子さん ▶

## 準硬式野球部 中・四国大会

医学部準硬式野球部  
中・四国大会 2位



写真は中四準優勝の時のものです

## 医学部FDに期待すること

地域・精神看護学講座 准教授 奥田 紀久子

科学技術の発展や人々の価値観の変化に加え、医療の高度化、専門化より、医療人に求められる知識や技能、資質は多様化、複雑化していると考えられます。そのような社会背景の中で、今日、医療人を育てる大学の教育力が問われ、教員一人ひとりが意識的に教育改善に取り組む必要性が生じてきました。

FD (Faculty Development) は、大学が教育機関であることの自覚と責任のもとに、教員が教授技術の向上や学生理解を深めるために研鑽を重ね、大学の教育目標を達成するための自発的活動であると考えています。

医学部では、平成10年に行われた「第1回医学教育ワークショップ」(写真1)から、FDの概念を意識した教育改革に取り組んできました。カリキュラム改革や、チュートリアル教育、クリニカル・クラークシップの導入など、教育実践を振り返り、フィードバックさせることの繰り返しにより、現在の高い教育力が得られたものと評価できます。

平成19年には、全学FD委員会の組織の一部として、医学部のFD活動のさらなる推進を目的とした医学部FD委員会が発足しました。現在、医学科、栄養学科、保健学科の3学科から選出されたFD委員により、事業計画の策定と研修の企画、運営を行っています。

今年度は5月に第1回目を実施し、林良夫HBS研究部長に



写真1

よる「ヘルスバイオサイエンス研究部の目指すもの」、松本俊夫医学部長による「医学部の現状と今後の方針」というテーマの講演からは、これからの教育や研究のあり方について、教員一同、時宜にかなった示唆を得ることができました(写真2)。また、医療教育開発センターや大学開放実践センターとの連携により、FDの内容をe-コンテンツとして活用したり、講師派遣を依頼したりするなど、有機的な活動が行われています。

医学部FDの充実と発展により、大学の教育力の向上が図られるものと確信しています。



写真2

## 学遊抄 臨床に燃えていた学生時代

ストレス制御医学分野 教授 六反一仁

私は内科医になりたかった。今頃、才能を発揮してきつと週刊誌で日本の名医の一人として紹介されていた、と今でも信じている（多分、基礎の先生の多くもそう思っておられるに違いない）。沖縄県立中部病院時代の3ヶ月の外科ローテーションでも「外科に来るなら胆嚢摘出術をやらせた」といわれたし、国立循環器病センターでも、一人で最初から心カテをやらせてもらったレジデントの第一号だったし、なまじっか妄想ではないと思っている。どこをどう間違えて基礎研究者になったのだろうか？

高校時代に愛読した高橋和巳の小説「邪宗門」のなかで、「京都のおひとはね、病気になるはったら府立病院はんか東山の日赤さんに入院できれば本望ですわん」。この文章に惹かれ、日本で二番目に古い医学校で、格式の高い臨床教育を受けたいと母校の門をくぐったのは35年も前になる。当時は、自分で言うのもなんだが、訪ねてきた父親に下宿のおばさんが「あんまりハンサムすぎて心配ですわ」と真剣に言われたほどの美男子だった（これ本当の話、今は当時の名残もないけれど）。純粋で何も知らない田舎の栄養失調児（体重50kg）だが、何かやっつけようと胸をふくらませていたように思う。

教養と基礎医学時代は京阪神を徘徊していた。勉強といえば生化学のTCAサイクルを丸暗記したことしか覚えていない。同級生は、「あいつは女と遊び回っている」と悪評を立てていたが、一度の恋愛に懲りて、卒業して3年後に家内と出会うまではデートもしたことがなかった。何かを求めていたのである。臨床医学が始まると俄然勉強した。休みには松下病院に毎日通い心電図を取り、与謝の海病院で入院患者の治療をさせてもらい、癌研病院、国立がんセンター、東京女子医大などを訪ねて

歩いた。ひよんなことから恩師の川井啓市先生と巡り合い、よく教授室を訪ねた。「おもしろいね」と言いながらいろんな話をされて、その時はいたく納得するのだが、後で冷静になると、いったい何を言っていたのか分からない。今になるとあれが洗脳なのだと分かった。所詮、この人だと信じ、だまされたと思ってアドバイスを受け入れて以外に道は開けてこないように思う。もう何年もお会いしていないが、季節の贈り物のお礼に「よく頑張っているね」「教授になっても大学の管理などのくだらないことに興味をもたず仕事をしなさい」「時代の先をみて仕事をしなさい」など、アドバイスをくれる。さすがに最近はミミズが這ったような文字で解読できない。学生時代に会った川井先生の年にいざ自分になってみると、随分我慢されたのだな、本当にいろんなチャンスをくれたのだな、と身にしみて分かるようになった。「徳島に帰りたい」といった時、どんなに川井先生が落胆したのかもよく分かる。医学部だよりの「学遊抄」の原稿を頼まれ、学生時代の思い出をたどってみても、恩師との出会い以上の重要なイベントは浮かんでこない。人の人生を変えられるような先生になりたい。そう思いながらも、つい説教の毎日である。せめて、学生時代の体力を回復しようと毎日せつせと眉山に登っているが、それもいつまで続くことやら。



## 第55回徳島大学解剖体慰霊祭

### 事務部学務課

平成20年10月3日(金)15時から徳島大学大塚講堂において、第55回徳島大学解剖体慰霊祭が開催され、御遺族、白菊会会員、医学部・歯学部・病院教職員、学生等関係者約538人が参列いたしました。

献体者の霊に黙祷を捧げた後、医学部長、歯学部長をはじめとする関係者が追悼の辞を述べ、その後参列者全員が祭壇に白菊を献花し、系統解剖、病理解剖のために献体して下さった方々の亡き御霊832柱の御冥福をお祈りしました。

昨年の映画「眉山」の公開以来、有り難いことに献体に対する世間の理解がますます深まってきており、今後も引き続き献体に対するご理解とご協力が絶えないことを願っています。



## 新任教職員あいさつ



循環器内科学分野 教授 佐田 政隆

当科は、徳島大学病院の診療科再編に伴い、旧第一内科と旧第二内科の循環器内科グループから設立された新しい教室です。伝統ある徳島大学の循環器内科学が今後更なる発展を遂げることができるように、教室員一同頑張っていきたいと思っております。

循環器内科教室の活性化のためには、まず症例数、特に急性期疾患に対する実績を向上させることが必須です。そのために、チーム医療体制の改善、パラメディカルの方々や他の診療科の先生方との連携を密にするように尽力したいと思います。また、近隣の先生方から症例を安心してご紹介いただくことができる信頼ある病診連携の確立にも努めてまいります。Common diseases に対して最善の治療体制を確立すると同時に、新規診断法、新規治療法の開発と導入に積極的に取り組んでいきたいと思っております。

最高レベルの日常診療が行われるなか学生教育ならびに医学研究が推進されていくように全力を尽くしていく所存です。今後ともご支援を何卒宜しくお願いいたします。



法医学分野 教授 西村 明儒

平成20年4月1日付けで、法医学分野の教授を拝命いたしました。昭和62年滋賀医科大学卒業後、神戸大学大学院に進学、学位取得後、兵庫県常勤監察医、滋賀医科大学助教授、横浜市立大学准教授を経て、今日に至っております。法医学の講義・実習を担当するとともに、以下を二本柱として研究に取り組んでおります。一つは、剖検脳を用いた研究です。統合失調症海馬歯状回の糖鎖異常沈着は、免疫電顕や蛍光多重染色などの手法により、ニューロンのアポトーシスと関係している可能性を見出しております。これらを剖検診断に応用したいと考えております。今一つは、死因調査から導き出される防災対策の構築です。阪神・淡路大震災、NY/WTCテロ、新潟県中越地震等の調査をもとに進めております。いわゆる先端医学とは多少違うスタンスにあるかとは思いますが、研究離れと言われる医学系の学生さん達に少しでも興味を持ってもらえる様、研究成果を紹介したいと考えております。



地域・精神看護学講座 教授 郷木 義子

本年4月1日より、徳島大学医学部保健学科看護学専攻へ赴任してきました郷木と申します。

研究分野は学校保健で、子どもの健康問題の変化と養護教諭の役割や歴史を研究しています。

徳島大学医学部保健学科看護学専攻では、平成20年4月入学生より所定の単位を取得すれば、養護教諭一種免許を取得することができるようになりました。あわせて保健科学教育部前期博士課程で養護教諭専修免許も取得できるようになりました。

看護師と保健師の資格を併せ持つ、より看護能力に優れ、教育的観点から養護活動ができ、子どもたちが生涯にわたって健康的に生きるための知恵と力を培い、自分で考え、自己決定能力を獲得することを支援できる、資質の高い養護教諭の養成を目指して、研究・教育を行って行きたいと考えています。微力ながら徳島大学の発展のために努力していく所存ですので、今後ともご鞭撻、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



診療放射線技術学講座 教授 生島 仁史

平成20年4月1日付で、徳島大学医学部・保健学科・放射線技術科学専攻・診療放射線技術学講座教授に就任いたしました生島仁史です。先進各国では今、急増するがんに立ち向かうため、国を挙げた戦略的施策に力を入れています。日本でも2007年4月から「がん対策基本法」が施行され、がん治療の専門家を増やし適切な医療を居住地域に係わらず提供できる医療体制の整備が始まりました。しかし、がんの初回治療において欧米では50%以上の患者に対して放射線治療が選択されるのに対し、本邦では初回治療として放射線治療が施行される割合は全体の約25%にとどまっています。そして、その背景に深刻なマンパワー不足があります。これから私は、放射線治療に携わる優秀な医療人を育成し地域医療の現場に送り出すこと、放射線照射技術科学分野において画期的な研究成果を上げることによりがん診療の向上に尽力する所存です。皆さまには今後ともご指導ご鞭撻の程よろしく願いたします。



予防環境栄養学分野 教授 高橋 章

平成20年10月1日付けで、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部予防環境栄養学分野を担当させていただくことになりました。平成元年に本学医学部医学科を卒業後、アラバマ大学、ピッツバーグ大学、山口大学、

大阪大学と転々とし平成12年に徳島大学に帰ってきました。この間、研究も生理学、細菌学、栄養学等を取り入れた内容へと変化しました。一か所に留まり一つのことを成し遂げるのがよいのか、外を色々見るのがよいのか意見の分かれるところだと思います。しかし行く先々で多くの経験とともに多くの師匠や友人と出会うことができ大切な財産となっています。これまでの経験を徳島大学のために一つでも役立てることができればと考えています。今後は食中毒の予防と治療法の開発及び食育に関する研究を中心に進めていく予定です。これからご指導とご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

## 新任准教授紹介

異動年月日	異動内容	氏名	所属
20. 4. 1	配置換	富田 修平	薬理学分野
20. 4. 1	昇任	野間 喜彦	腎臓内科学分野
20. 5. 1	昇任	前川 洋一	生体防御医学分野
20. 5. 1	昇任	大塚 秀樹	放射線科学分野
20. 7. 1	昇任	中村 教泰	顕微解剖学分野
20. 7. 1	昇任	赤池 雅史	循環器内科学分野



# 退任の挨拶

地域・精神看護学講座 前教授 上野修一

平成20年7月16日付けで愛媛大学大学院医学系研究科脳とこころの医学分野に転出しました。徳島大学では、平成14年5月1日精神医学分野助教授として赴任させていただいて以来、約6年間お世話になりました。その間、大学の法人化、医学部のヘルスバイオサイエンス研究部への移行、医師臨床研修制度の開始、保健学科のヘルスバイオサイエンス研究部への合流など徳島大学医学部の変遷を眼のあたりにし、臨床研修センター副センター長、医学部長補佐教育担当、医学部FD委員会委員長、保健科学教育部長代理として、医療の教育現場を経験させていただきました。

本当にありがとうございました。

愛媛大学では、卒前卒後の医学教育、研究指導、精神科臨床を任せていただいております。まだ、赴任したばかりで、慣れずに右往左往していますが、徳島大学医学部で、医学教育、保健学教育に関わらせていただいた経験を少しでも還元できるよう微力ですが、頑張らせていただきます。今後ともよろしく願いいたします。

最後になりますが、徳島大学医学部のますますのご発展を祈願し、私の退任の挨拶とさせていただきます。

## 医学部行事予定 (平成20年10月～平成21年3月)



- 10月1日(水) 後期授業開始
- 10月3日(金) 解剖体慰霊祭
- 11月1日(土) 大学祭(3日(月)まで)
- 11月2日(日) 徳島大学開学記念日
- 11月17日(月) 第103回医師国家試験願書受付(12月5日(金)まで)  
試験日:2月14日(土)～16日(月)
- 11月28日(金) 第92回助産師国家試験願書受付(12月19日(金)まで)  
試験日:2月19日(水)
- 第95回保健師国家試験願書受付(12月19日(金)まで)  
試験日:2月20日(金)
- 第98回看護師国家試験願書受付(12月19日(金)まで)  
試験日:2月22日(日)
- 12月22日(月) 第61回診療放射線技師国家試験願書受付  
(1月13日(火)まで)  
試験日:2月26日(水)
- 第55回臨床検査技師国家試験願書受付  
(1月13日(火)まで)  
試験日:2月25日(水)
- 12月25日(木) 冬季休業(1月7日(水)まで)

- 21年
- 1月中旬 第23回管理栄養士国家試験願書受付  
(1月下旬まで)  
試験日:3月下旬
- 17日(土) 大学入試センター試験(18日(日)まで)
- 2月25日(水)～2月26日(木)  
入学試験(前期日程)
- 3月12日(水) 入学試験(後期日程)
- 3月23日(月) 卒業式・大学院修了式
- 3月25日(水)～3月31日(火)  
学年末休業
- 26日(木) 助産師、保健師及び看護師各国家試験合格発表
- 27日(金) 医師国家試験合格発表  
\*診療放射線技師及び臨床検査技師国家試験の合格発表は、3月31日(火)
- 管理栄養士国家試験の合格発表は、5月上旬



徳島大学は、学校教育法第69条の3第2項の規定による「大学機関別認証評価」を受け、「大学評価基準」を満たしていると認定されました。  
(平成19年3月28日)

- 認証評価機関  
独立行政法人大学評価・学位授与機構
- 認証期間 7年間  
(平成19年4月1日～平成26年3月31日)

## 編集後記



現在進行している世界規模の金融危機が示すように、経済におけるグローバル化には、大きな負の側面があるようだ。しかし、医学や医療技術に関しては、人類共有の財産として、先進国にその方法論や知識を求め、世界的レベルの医療人を育成していくことは、医学部にとって大切な役割の一つである。今号の生き生きとした文面からも分かるように、個人としても、留学を経験することで自分の視野の広がりを実感することになる。研究部や大学院に止まらず、これからは、学部教育のグローバル化も推進されるであろう。将来、医学部での講義がすべて英語化され、入試の国際化が進み、病院実習に海外の先進病院も対象とされ、「地域医療」とは、国際的な医療過疎地域での医療活動を指す、そのような時代が来るかもしれないと、秋の夜長に夢想している。

発行 徳島大学医学部 編集 医学部広報委員会  
広報委員 勢井宏義(委員長)、泉 啓介、曾根三郎、金山博臣、二川 健、田村綾子、森口博基、宮本敏克

本誌へのご意見・ご要望は、(第1 総務係・榎谷) E-mail: isysoumu1k@jim.tokushima-u.ac.jp まで  
お願いします。なお、写真は執筆者各位の提供により掲載しています。

Tel: 088-633-9118 Fax: 088-633-9028

URL <http://www.hosp.med.tokushima-u.ac.jp/university/servlet/index>